The Historical Society of Japan

の一国、もしくは一地域の歴史にすぎないものも多いし、「地中海」という枠のなかにとどまり充足してしまうこともある。ところが本書では、地中海と地中海外の地域との関係が多く言及されている。ドイツ、ロシア、スペイン以外のハプスブルク支配地域、そしてアメリカやイギリスなどとの関わりがそれであり、地中海世界をめぐる国際関係の歴史といった一面を本書の叙述は有している。その意味で、まさにこの巻は「地中海世界史」の名にふさわしい。

こうした国際性とも連なるのだが、本書の各章は、その対象としている時代にかかわらず、それぞれに、現代世界の抱える問題との結びつきを深く有している。序で扱われたブッシュ親子等の行動・言説と地中海世界との関わりは、地中海世界の歴史を考察する意義の象徴ともいえる。加えて各章では、各時代に地中海世界に現れた帝国がとりあげられているが、その統治が抱える諸問題は、昨今の覇権主義の成否を考察する上で、示唆するところが大である。地中海世界の歴史が教えてくれるもの奥深さを堪能しつつ、読者は本書の頁をめくり続けるであろう。ぜひ手元に置きたい一冊である。

（亀長洋子）

ピエール・ノラ編／谷川　稔監訳

『記憶の場――フランス国民意識の文化＝社会史――第三巻　模索』

岩波書店　二〇〇三・三刊
A5　四九八頁　六六〇〇円

フランス歴史学からたえず生まれる先鋭的な方法論は、諸国の歴史家達に大きな刺激を与えつづけてきた。足かけ九年をかけて一九九二年に完結した論文集『記憶の場』もまた例外ではない。記憶と歴史という論題をかかげたこの書物は、翻訳や同系の研究プロジェクトといった反響を各国で呼びおこしている。そうした流れに棹さしつつ日本の翻訳チームは、原書におさめられた一三五の論考から約三〇編を精選し、独自の編集意図をもって全三巻の書物に再構成した。「模索」という副題を与えられた本書は、その最終巻にあたる。

本シリーズは、フランスの国民的・集合的記憶が宿る「場」についての多種多様な考察の集合体である。とりあげられるテーマは狭い意味での場所や記念碑的建造物にとどまらない。参考までにあげれば、邦訳第一巻では、ネーションを貫く宗教や地域といった対立軸に、第二巻では三色旗・祝祭など共和国統合の象徴に、焦点があてられている。

このようにやや抽象的な主題に重点をおいた二冊と、第三巻は対照をなす。本書前半の軸となるのは、歴史上に残る固有名をめぐる考察である（「ジャンヌ・ダルク」「遺骸の帰還（ナポレオン伝説）」「兵士ショーヴァン」「街路の命名」「パリの彫像」）。後半では、原書第三部「さまざまなフランス Les France」に主によりつつ、「ツール・ド・フランス」「ガストロノミー（美食）」といった、多様な「フランスらしさ」を代表する社会事象がとりあげられている。

監訳者の谷川稔氏によれば、『記憶の場』日本語版においては、国民史を相対化するという原著の意図をくみとりつつ、フランスという歴史的構成物の多元性を提示することに力点がおかれたという。第三巻は、

NII-Electronic Library Service

The Historical Society of Japan

可視的・具体的な事例のパノラマによってそれをしめすという、重要なはたらきを担う。

一方、方法論的な側面では、シリーズの掉尾を飾る編者ノラの論考「コメモラシオンの時代」がこの巻におさめられている。この論文はまず、『記憶の場』という長期プロジェクトがおかれた文化的・政治的・社会的背景を説きおこす。そして、重なりあいながら分裂する歴史・記憶・コメモラシオン（記念＝顕彰）という三つの位相が現代のフランスでどのように連動してきたのかを提示する。「記憶の場」をめぐるノラの考察は史学史的であると同時に、日本語版の題名を借りていえば、「現在」についての文化＝社会史でもあるのだ。

この書物全体をつらぬく原語の緊張感を失わず、なおかつ平明な日本語へと移しかえた翻訳チームの労苦はいかほどのものであったろうか。また、各論考には丁寧な訳者解題が付され、日本の読者にとっては必ずしもなじみのないテーマについても理解を助けてくれる。これらを手がかりにして本書をひもとけば、このプロジェクトは結局のところノスタルジックなナショナル・ヒストリーや、記憶（感情的で生きられるもの）と歴史（批判的で知的な営み）という二分法に帰着するのではないか、といったやや性急な読解はおのずと後景に退いていくことだろう。

歴史家の営みについての自己言及をつうじて歴史を叙述するという編者の戦略はもとより単純なものではない。そこには、国民国家論から歴史学と実社会との関わりにいたる幅広い問いが織りこまれ、堅固な実証に裏打ちされた各論は微妙に色合いの異なる答えをつむぎだす。この野心的な書物をどのように位置づけるのか。読者の側は、記憶という行為と対をなす忘却のはたらきを視野にいれた、繊細な意識をもつことがもとめられよう。訳書の出版によって貴重な知的模索の機会が与えられたことを喜びたい。

（工藤晶人）

新刊紹介

『ユーロとイギリス――欧州通貨統合をめぐる二大政党の政治制度戦略――』

力久昌幸著

木鐸社　二〇〇三・三刊
A5　三六九頁　六〇〇〇円

この原稿を書いている二〇〇三年末の段階でイギリスはまだ欧州単一通貨、「ユーロ」に参加していない。また、その兆しもみえていないようだ。このたいへん興味深い問題を、「古風」な政治史の立場から解明しようとするのが本書である。

分析対象は、「ハイ・ポリティックス」。扱う時代は、一九八〇年代から今日まで。主な史料はイギリスの新聞、それも「高級紙」、および労働党と保守党の「マニュフェスト」のたぐい、それに彼の国で書かれた各種政治分析の文献である。

通常理解される意味での歴史書はほとんど活用されていない。通貨問題ゆえ、経済学者、産業界と金融界、労働組合等の見方も深く関係するはずなのに、ほとんど触れられていない。じつは、本書の表題がミス

NII-Electronic Library Service